

女神と人間のあいだに生まれた子供たち

逸身喜一郎

ギリシャ神話には、男の神が人間の女を身ごもらせる話が、枚挙に暇なくある。しかしその逆に、女神が人間の男の子供を宿す話はきわめてまれである。考察に値するのは、後で述べるようにわずか三例あるにすぎない。

だいたい神々と人間との性の交わりは、神々の強引さによって引き起こされるものだから、男性女性の生理的条件を考慮すれば、この数字のアンバランスは当たり前と言えば当たり前とも言える。あるいはこうした神話群の背景に、性交は、男が常にリーダーシップを取るのが常態であり、かつ、男なら力を奮ってしかるべきとする、古代ギリシャ人の、ただし言うまでもなくこの民族特有の考え方ではない、「男性優位主義」を読み取ることもできなくもない。

しかし「神話を生み出す背景の解釈」「その深層の意味」を問題にするまえに、まずは神話そのものの読解がもっと必要であろう。「神話」は現実には叙事詩などの「作品」の中に、「物語」となって姿を定着させているわけであるが、この読解とは、言い方を変えれば、「神話」がそれらの「作品」より一步前のところで流動化していた頃の、「物語」になる前の様相を推測してみる作業である。「神話」は「物語」となることで姿を固定化するけれども、「物語」は「物語」それ自体の論理によって発展して「神話」の内容に新たな要素を加え、改変する。それがまた、次の「作品」を生み出す核、すなわち「神話」となる。「神話」と今に残る「作品」の間には、きわめて長い「固定化」と「改新」の歴史があったはずで、このことを考慮すれば、「詩人が『神話』を素材にして『作品』を創作した」という言い方は、やや安易に思われる。

「物語」は好んでディテールに凝り、肥大させる。あるいは大きくなりすぎたディテールを整理する。

その結果、ひとつの「神話」が複数のヴァージョンを持つことはまれではない。そして、たとえ後の時代に出来上がった「作品」であっても、そこに出現するヴァージョンが、それよりも前の時代の「作品」のヴァージョンよりも、当該「神話」の、より古い形を残していると考えたほうがよい場合がある。例えばピンドロスのヴァージョンがホメーロスのヴァージョンより「古い」と、しばしば研究者が推測することがあるように。また画像資料においても、現存する最古の資料が例えば紀元前六世紀後半であるとしても、そこに描かれた「神話」が、それより古くはないとは言えない。

「神話」とは何であるか、「民話」とはどう違うのか、その定義を問いはじめるときわめて厄介なことになるので、ここでは不問に付すが、「神話」が「作品」よりも（それも現に我々が読むことのできる「作品」以前の、もはや散逸した「作品」すべてを含めてもなお）きわめて古いことは強調されてよい。誇張すれば「神話」は、少なくとも「民話」は、人間の社会生活と同じくらい古く、さらに誇張すれば「言葉」の発生と同じくらい古い。そして「神話」は限りなく、改変され、かつ固定化される。

いうまでもなく、こうした考え方をがむしゃらに進めて個々の「神話」の読解を始めれば、アナクロニズムに陥る危険がある。とはいえ何にでもあてはまる単純明快な方法論があるはずもなく、結局のところ歪んだ推論を避けるためには、個々の「作品」を丁寧に読み、常識を働かせることしかないのかもしれない。

私の立場について、もう一言。『イーリアス』『オデュッセイア』がどのようにして、文字に書かれたかという疑問は依然、残るものの、きわめて長期間にわたる「口誦叙事詩」の伝統が背景にあるとする考え方は受け入れてよいだろう。つまり『イーリアス』の前にも「作品」群があって、ホメーロスはそれらを受け

入れ、かつ改変しながら『イーリアス』を作り上げた。先に述べた、「神話」の「固定化」と「改新」の過程も、その一環である。ただしこれらの「作品」は必ずしも、表現の一つひとつの細部にいたるまでが、揺るぎないものとして決定していたと考える必要はないだろう。そのみか互いに突き合わせれば齟齬を生じさせかねない「神話」の諸ヴァージョンが、併存してもいた。『イーリアス』のモデル」といっても、口誦のたびごとに流動性を許容する「作品」ととらえておいたほうがよい。

さて本題に戻って、「神々と人間の交わり」というモチーフならば、世界の多くの神話同様、ギリシャ神話でもそれ自体、さほど重要性がない、ありふれたモチーフである。しかし限定が加わり「女神と人間の男の交わり」という、少なくともギリシャ神話では特殊なモチーフとなると、話はちがってくる。

ギリシャ神話の中に置いた場合、この「交わり」には、二つの「優位性（ないしは力関係）」の矛盾があらわになる。つまり「神は人間より強く、積極的である」という前提と、「男は女より強く、積極的である」という前提が衝突する。後者についてはいくつかの要素が混ざっている。まず単純に「りよりよく膂力」の差。第二に女は男を強姦できないという生理的条件。第三に「性欲の強い女」は貞淑でない、すなわち「正しくない」とする文化状況。よって男神と人間の女との交わりが語られる神話では、それ以上、何の説明も必要もなく、単に「交わった」という「事実」だけで話を先に進めることができるのに反して、その逆に、女神と人間の男の場合には、「交錯する優位性の向き」を解きほぐすために、どうしてそんなことがおこったかを説明する部分が、必然的に神話に導入される。

「女神と人間の男の交わり」が成立しがたいことは分かったとしよう。とすれば、それにもかかわらず、

そうした結びつきをあえて前提とする「神話」の存在理由である。しかしここでも対象を、子供の有無を基準にふたつに分けたほうがよい。

子供がない場合（というより当該神話ないしは民話が、子供の存在を無視する場合）、男女の共生のありかた（と多くの場合、離別の様式）が話の中心を成す。ところがふたりから子供ができる場合、そもそも話に「共生」の要なく、「一度だけの交わり」を想定するだけでも話は成立する。「神話」の類型上、両者は別々に考えるべきであろう。そこで本稿がさしずめ問題とするのは、人間の男の子供を生んだ女神であり、さらには女神と人間の男の組み合わせそのものよりもむしろ、女神と人間の男との間に生まれた子供たちに通ずる、ある種の親近性・類似性である。もちろんそれは、異種間婚姻が引き起こした遺伝的宿痾しゆくあとか、ただならぬ母親をもった息子たちの不幸の究明とあって、ちやかすほどのものではない。

女神を母にもつ人間で意味ある存在を、私は三人しか知らないし、おそらく他にあるとも思えない。その三人とは、アキッレウスとアイネイアース（この二人は誰でもすぐに思い出す）、そしていまひとりはメモノンである。⁽¹⁾

このうちアキッレウスとアイネイアースの親近性は、西洋文学史の中でいまさら言挙げするほどのことではないかもしれない。しかしそこにメモノンを加えることによって、ウェルギリウスの描くアイネイアースはアキッレウスを範にしていると言っただけ言って済ませることのできない、もっと深いつながりがみえてくる（ような気がする）。そこでまず、これら三人に関連する諸神話ないし叙事詩群を構成しているモチーフやエピソードが織り成す、派生・発展の道筋を考えたくなるものの、いずれが先でいずれが後とは決めがたく入

り組んでいる、ネットワークのありさまを掌握すること。そしてその網の中で、「女神と人間の男の交わり」は、副次的で、周辺部の単なる一要素にすぎないのか、それとも話の生成を促す、中核を占めているのかを考えてみる。これが「神話」と「作品」の関係を探ることを遠くに見据えての、本稿の課題である。

アキッレウスの母は女神といっても下等な神（ニンフ？）の、テティスである^②。彼女は「結婚」後も、その父、海神ネーレウスのもとで、他の姉妹たちと暮らしている。『イーリアス』ではアキッレウスの呼びかけに答えて、あるいは息子の嘆きに応じて海の中から出現する^③。アキッレウスの父親ペーレウスは、プティアーにひとりで暮らしているらしい。『イーリアス』で語られることからは、すくなくともこの「夫婦」が、幸せな新婚生活を営んだことを窺わせるものは何も記述されていない。そのくせ（それだからこそ）、この息子はどこか母親に依存したところがある。これはホメーロスの真意ではなかったかもしれないが、今日の目にはそう見える。

そもそもペーレウスとテティスとの結婚は、トロイア戦争の一部始終を逐次たどった「叙事詩の環」にあっては、トロイア戦争の発端の出来事として位置づけられている^④。後代に標準化したヴァージョンによれば、彼らの結婚式に神々が招待されたものの「エリス＝諍い」だけがよばれず、この女神が怒って投げ込んだ黄金のリンゴが、三女神の繰り広げる美女コンテスト（パリスの審判）へと発展するわけである^⑤。ただし『イーリアス』からは、こうしたエピソードは抹殺されているに等しい^⑥。

ペーレウスがテティスを身ごもらせたいきさつは、決して平和なものではない。姿を火に獅子に、変えに

変えまくって抵抗するテティスを屈服させる「英雄」ペーレウスの話の初出は、現存する作品ではピンドロス『ネメアー競技祝勝歌第四』である。『イーリアス』はもちろん、民話的要素を好んで取り入れる傾向のある「叙事詩の環」の『キュブリア』すら、この「格闘」にふれていないようであるが、この話は当然、ピンドロスよりもっと古くまでさかのぼるはずである。⁽⁸⁾『オデュッセイア』で描かれる海の老人とメネラーオスの格闘を思い起こせば、テティスは『イーリアス』以外の世界ではもともと、海に棲む魔物のおもむきすら備えていたのかもしれない。人魚のような「海の精」とする推測も現にある。⁽⁹⁾

人間ではない異様な種族の女との「格闘」ならば、当事者の男にとって（男はまた「神話」の語り手であり、主たる聴衆である）、人間の処女を「征服」するのに比べ、はるかに後ろめたさが少なく、ゆうに「冒険譚」たりうる。さらにこれに付随して、「贈り物」があったりすればなおのこと、この娘は「高価な獲得物」である。こうした「冒険譚」が民話の重要な要素であることは言うまでもなからう。その反面、この種の交わりはたいいてい、破局に終わるよう、話はできている。人間外の種族との性交は決して幸せな結果をもたらさない、足元に目を向けよ、と、若者を戒める「教訓」にも、「冒険譚」は容易に結びつく。

もちろんピンドロスは野蠻ではなく、彼の描くペーレウスの話は「冒険譚」ではない。しかし彼も、彼に「競技祝勝歌」の制作を依頼した、「英雄」の子孫を自負する男たちも、ペーレウスの視点に立っている。テティスとの「結婚」は、ペーレウスが優れた息子を得る道筋であり、道義心に篤い男にゼウスが与えた栄誉の印なのである。したがって、テティスとの「結婚」に先立っておこる人妻（アカストスの妻ヒッポリュテー）の誘惑が「試練」であったように、「格闘」も栄光にいたる「試練」として描写される。「格闘」に負

けたテティスならびにその結果うまれたアキッレウスの立場からすれば、この「格闘」は幸せな出発とは言えない。しかしそれは「競技祝勝歌」とは無縁の想定である。

厳密に考えれば、ペーレウスが「格闘」をへてテティスを「獲得」する話と、神々に祝福された二人の結婚式の話とは一致しないように見える。なぜなら前者にしたがえば、テティスはただ一回の交わりによってアキッレウスを身ごもり、その後、父の性を受け継いだ死すべき子供をペーレウスのもとに送りつけたものの、自分は以前と同じように海の中に住んでいることになる。ところが後者に従えば、少なくともある期間、二人は居をともにしたはずである。さらに付け加えれば、「強姦・妊娠」のあとでの「神々の祝福と結婚式」という道筋は不自然である。もちろんありえないけれども、シニカルにすぎる想定といえよう。

しかしこの「不一致」は、実のところ「神話」を「歴史」と混同し、現実に生起してもいない出来事に対し、実際に何が起こったかを問うことから生じた誤謬である。「神話」としてはまず最初に、アキッレウスがいた。それと同時に、あるいはそのあと、彼の父母は人間ペーレウスと女神テティスであると定まった。そしてアキッレウス誕生の起源である、この二人の、幸いな、しかし同時に不幸ともいえる、交わりが必要となった。ところが最初に述べたように、女神と人間の男の性交は尋常ではない。そこでそのディーテールを具体化しようとして「物語」が発展する。こうしてできてくる「神話」が「格闘・獲得」であり、あるいは「結婚式」なのであって、両者は同じ「神話」の二つのヴァージョンと見なすべきであろう。ペーレウスとテティスの結婚をあたかも歴史的事実のように考え、「最初の交わり」から「離別」にいたるいきさつの「真実」を確認しようとしても無駄である。現にこの「神話」をたびたび「競技祝勝歌」でとりあげたピン

ダロスにとっては、どちらも「起こったこと」なのである。

ピンダロスは『ピューティアー競技祝勝歌第三』では、ペーレウスとテティスとの神々に祝福された結婚を、ペーレウスが享受した至福の絶頂として、やがて味わわねばならない不幸（息子アキッレウスの戦死）との対比で描いている。また『ネメアー競技祝勝歌第五』では、人妻の誘惑を心正しくも斥けたペーレウスをゼウスが嘉して、テティスを妻に与え、神々はその結婚を祝ったと歌う。あきらかにこの二つの歌では、「結婚式ヴァージョン」だけが採用されている。一方、ペーレウス・アキッレウス父子の武勇を、ひいては遺伝的資質を称える視点から書かれたピンダロス『ネメアー競技祝勝歌第三』では、言葉のうえで「格闘」と「結婚式」が共存しているように見える（「ペーレウスはテティスを「捕まえ押し倒した」(katēlupōsen)」三五行、ならびに「人馬ケイロンはテティスを「嫁がせた」(gūphōse)」五六行)。しかし実のところ、「嫁がせた」は、その直後にアキッレウスの養育が語られることからみても、「テティスにペーレウスの子種を身ごもらせる助力をした」ことの婉曲表現と考えるべきであろう。この歌では、「獲得・格闘ヴァージョン」が、先にひいた、テティスの変身と抵抗の描写を含む『ネメアー競技祝勝歌第四』同様、「男らしさの発露」として捉えられている。

『イストミアー競技祝勝歌第八』の場合には、おそらく「結婚式ヴァージョン」を読み取るべきなのだろう（ゼウスも皆と一緒に、テティスの結婚を氣遣った。詩人たちはその口から、アキッレウスの若々しい^{いさまし}勲を、無知なるものたちに知らしめた」四六行）。しかしそれと同時に、女神「テミス」の予言の中にある「満月の夜、処女のくつつわを解かずべし」（四四行）という一節は、あきらかに「格闘・獲得ヴァー

ジョン」を連想させる言葉づかいである。「満月の夜」は、海の精が浜辺に姿を現す時であるとする「民話」の類型を受け入れればもちろん、それを退けてもなお、情景は「新婚初夜」とは思いにくい。この「祝勝歌」には、後ほどまたふれる。

要するにピンダロスにしてみれば、二つのヴァージョンは決して矛盾していない。「格闘」があらうとなかろうと、女神との結婚は、ペーレウスが獲得した栄誉の表象にして、かつゼウスが認め、かくあるべしと定めた、神々が祝福する比類なき幸せであり、同時にまたそれは人の世の常として容易に不幸に転じうるものなのである。

とはいえ二つのヴァージョンのいずれが先にできたか、推測は許されよう。「結婚式ヴァージョン」は「エリス」諍いの排除」すなわち「黄金のリング」のモチーフと密接に結び付いている。「諍い」を排除することが逆説的に三女神の争いを誘発し、三女神はパリスに「世界の覇権／戦闘での不敗／世界一の美女」の「三者択一」をせまる。そこには「アレゴリー」の要素が抜き難く存在する。私自身は、このアレゴリーよりも、「格闘・獲得ヴァージョン」のほうに、よりプリミティブな「民話」を見る。

もっとも、まさにこの「アレゴリー」の存在ゆえに、「エリスの排除」や「黄金のリング」の案出を、ヘレニズム期の着想として、時代を下げる考え方もある。たしかにプロクロスの梗概には「エリスの出現」とあっても、「排除」は明示されていない。しかし「アレゴリー」という言い方は避けるにしても、『キュプリア』には、エリス（諍い）とかネメシス（懲罰）とかモーモス（叱責）といった「抽象概念」の人格化は顕著であり、これはヘーシオドスの『神統記』と軌を一にする「神話」の整理である。

さきに「格闘・獲得ヴァージョン」をテティスの立場からすれば、不幸の始まりと記した。しかし「結婚式ヴァージョン」として、幸せな出発と無縁である。一見、平和を保証するかのような「エリス＝諍いの排除」がその実、トロイア戦争の出発点として位置づけられているからである。さらに後述する「テティスからは父親よりも強い息子が生まれることが決まっており、それゆえにゼウスが彼女を断念して人間の女に与えた」というモチーフを、この「結婚式ヴァージョン」と結びつけるのであれば、神々は新郎新婦の門出もさりながら、ゼウスの地位の永遠の保全をことほいでいるのであって、テティスの心情からすれば（「神話」に「心情」を持ち込んで良いかどうかひとまず不問に付す）、神々がはしゃぐほどに、恨めしく思えたはずである。ただし、この「父親より強い息子」のモチーフは、ゼウスの後ろ盾ないしは配慮によってテティスを征服するペーレウスを想定すれば、「格闘・獲得ヴァージョン」とも結び付けることも可能であって、「結婚式ヴァージョン」の占有ではない。

テティスが人間ペーレウスの子供を生まされたのは、あるヴァージョンによれば、もしテティスと結婚したならば、その交わりから父親を凌駕する息子が生まれてくるという、「テミス＝掟」の予言があったために、ゼウスもポセイドーンも、この女神が欲しかったのにもかかわらず断念せざるをえず、代わりにペーレウスとくつつけたという経緯があったからである。このピンダロス『イストミア―競技祝勝歌第八』の神話は、『イーリアス』では明示されてはおらず、「叙事詩の環」で『イーリアス』以前の出来事を扱った『キュプリア』でも言及されていたように思えない。^⑫むしろ『キュプリア』の作者は、テティスがヘーラーをおもんばかってゼウスの求愛を拒んだために、ゼウスが腹を立てて、罰として人間の男と結婚させたという

ヴァージョンを採用したようである⁽¹³⁾。

『キュブリア』はこの後、「結婚式ヴァージョン」に進む。しかし「ゼウスの腹いせヴァージョン」と「格闘・獲得ヴァージョン」とを結び合わせた「物語」（テティスがゼウスを避けたため、腹を立てたゼウスは、テティスをペーレウスに強引に奪わせる）も、今に残っている「作品」には例が見当たらないけれども、作りえたであろう。「格闘・獲得」と「結婚式」の二つのヴァージョンが入れ換え可能なように（そしてあまり突き詰めなければ両立可能なように）、「ゼウスの腹いせ」と「父親より強くなる息子」の二つのヴァージョンも、ひとつの「神話」に属する入れ換え可能な（そして両立も不可能ではない）ディーテールであると考えられる。したがって、一部（例えばポセイドーンの参入）はピンダロスの創作であるとしても、⁽¹⁴⁾「父親より強くなる息子」の初出が『キュブリア』より遅いという理由だけで、これを後代に帰すことはない。むしろ骨子は古い神話である可能性は強い。

「父親より強くなる息子」の話は、ウーラノス・クロノス・ゼウスと父子の間で繰り返された、覇権の交替の神話と不可分の関係にある。クロノスが生まれた子供を次々に呑み込んだように、ゼウスにもなにかしら対策を立てたようにさせなければ、現にあるゼウス中心の秩序が危うく見えるからである。しかしゼウスは危機を回避した。その一つのヴァージョンが、ゼウスの子供を孕んだ「メーティス」知恵⁽¹⁵⁾を呑みこんだところ、子供はゼウスの頭から出てきたが、その子が女神アテーナーであるという神話であり、いま一つが、アキッレウス出生の神話である。

『イーリアス』第一巻三五—三行以下、母親を呼び出したアキッレウスが、

私が短命な存在となるにもかかわらず、その私を、母よ、あなたが生んだからには

ゼウスは少なくとも栄誉だけは、我が手にさずけてしかるべきであった

と迫る箇所には、ゼウスがテティスを断念した話を念頭に置いて読むと、まるで「自分（アキッレウス）が、ゼウスではなく人間の男の子供になることで、テティスはゼウスを救ってやった」と、暗に仄めかしているかのように解釈したくなるような、奇妙な言葉使いが目につく。ただしこれはあくまで「深読み」ないし「曲解」であって、『イーリアス』のこの場面を、流れに沿って額面どおり受け入れれば、このあと、テティスはゼウスに恩義の「貸し」があるから、今回「お返し」を受けても当然であること、「恩義の貸し」とは、かつてオリュンポスの諸神が全員一致してゼウスに反乱をたくらんで（覇権の打破！）彼を縛り上げた際、テティスが救助したということであると、説明される。しかしこの神話は、『イーリアス』のこの箇所以外、他のどこにも見られない不思議な話であって、研究者はしばしばホメーロスの創作と考えている。ひょっとすると、この新たな「説明」が今ある『イーリアス』の中に、ディーテールを膨らますべく入って来て、本来、意図されていた「恩義」を隠してしまったのかもしれない。とすれば、先の「深読み」は、的をについている。「恩義」については本稿、最後にまた考察する。

アキッレウスが「民話」から「叙事詩」の主人公に「格上げ」される過程で、姿を消したモチーフが、いわゆる「アキレス腱」の物語かもしれない。テティスは生まれた子供を不死にしようとして、冥府のステュクスの川の水に赤ん坊のアキッレウスを浸した。しかし浸す際に手をつかんでいた「かかと」は、そこだけ水にふれず不死でなくなり、結局、そこを弓で射られ、命をおとすことになった。ただしこの神話は、現

存する作品中、最初に言及されるのが、紀元後一世紀のローマのスタティウスの『アキッレウス物語』であり、図像資料にも古いものはない。⁽¹⁶⁾とすれば「アキレス腱」が急所であったとするヴァージョンは、『イリアス』その他の叙事詩が完成したあとにできた「民話」ということになる。

しかしステュクスの水はともかく、アキッレウスの死体をめぐる戦闘を描いた、紀元前五四〇年頃の壺絵には、地面に倒れたアキッレウスには矢が二本ささっており、そのうち一本は「かかと」を貫いている。⁽¹⁷⁾その横には弓を引いているパリスが描かれているから、「かかと」を射られることとアキッレウスの死との重要な関係は、決して新しいものではない。アポロドーロスの『摘要』(五、三)には、スカイア門のそばでパリスとアポッロンに「かかと」を射られた、とある。アポロドーロスのこの記事の典拠は、「叙事詩の環」のひとつ、アルクティーンノスの『アイティオピス』かもしれない。⁽¹⁸⁾

そもそもメルヒエン・モチーフとして、この種の「一部を残して不死である英雄」はめずらしくない。アイスキュロスは今は散逸した悲劇の中で、アイアースが腋の下を除いて不死身であったというモチーフを使ったという。⁽¹⁹⁾「一部を残して不死である英雄」というメルヒエン・モチーフは、英雄が多大な活躍をしたにもかかわらず、最後にその秘密の部位を打たれて死ぬ話を、当然の帰結として内包していること、言うまでもない。⁽²⁰⁾アキッレウスの父親が人間とされた時点で、彼は死ぬことが決まっていた(そもそも「死」の物語を含まない「英雄伝説」は成り立つのだろうか? 「英雄」は必ず死ななくてはならないのではないか?)。物語の展開上、彼が強ければ強いほど、その死に方は意表をつくやり方でなければならぬ。ギリシャ軍中、最強の英雄が、女たらしの(当然、奸計に長けた?)、卑怯な、トロイア人パリスの矢にかかって死ぬとい

う「逆説」と、身体の一部に致命的弱点をもつことは、対概念のように思える。とすれば、アキッレウスが「もう少しで」不死になるところであったという話も、アキッレウスにまつわる一連の神話の中に古くからあったのでなかるうか。

現に「ステュクスの水」とは別のヴァージョンによれば、テティスが夜ごとに赤ん坊のアキッレウスを火にかざして、「死すべき部分」を焼いて不死性を与えようとしたところ、ペーレウスは赤ん坊が殺されると思っ**て**叫び声を上げ、阻止したために、テティスは不死身にならないままのアキッレウスを残して去ったという。ただしこの神話も、現存の典拠は古いものではない。初出はロドスのアポロニオスであり、さらにアポロドーロスの『神話集』(三、一三、六)が伝えている。

以上、アキッレウスについては、ひとまずここで終える。

アキッレウスの出生の事情に比べると、アイネイアースの誕生は、いましロマンティックと言えなくもない。少なくとも「セックスの専門家」である女神アプロディーテーとトロイアの王子アンキーセースの場合、二人の間に暴力はなかったし、実質的に誘惑しているのは女神のほうからである。もっとも女神は本性を隠し、かわいい人間の娘に変身し、アンキーセースの欲情をかきたてて、彼に性交の主導権を取らせるのである。⁽²²⁾

ここには、「神が人間の優位にたつ」ことと「男が主導権をとる」ことの、上手な妥協案が見て取れる。さらに付け加えれば他の女神とちがって、アプロディーテーの場合、情事は「職能」のうちにあるから、彼

女の積極性も許される。

それでも交わりのあと、女神ははげしく自分の「過ち」に後悔する。⁽²³⁾ 男は男で、相手が女神であることに気が付くと、「このさき萎えることのないよう」慈悲をことう。⁽²⁴⁾ 「やらねばよかった」の思いは両者に共通で、当然、ふたりの邂逅は一度きりである。このいきさつは『ホメーロス讃歌』のひとつ『アプロディーテーへの讃歌』に語られている。ここでの筆致をもとに想像すれば、なるほどこのたった一度の出会いの描写そのものはなかなかのびやかであるものの、当事者にどうもこの先、甘美な思い出を残しはしなかった。その点、ペーレウスとテティスに似ていなくもない。

この『讃歌』によればアプロディーテーは、やがて生まれる子供をニンフにあずけ（子供を手元で育てないのもテティスと同じ）、子供は大きくなったのちにトロイアに戻ることにした。アキッレウスの場合、人馬ケンタウロスのケイローンに養育され薫陶を受けたという話がピンダロスに見られるが⁽²⁵⁾（ただしホメーロスはほとんど、ケイローンに言及しない⁽²⁶⁾。彼を養育したのが人間ポイニクスであることに、『イーリアス』第九巻では重要な意味がある）、そのような養育係はアイネイアースにはいない。ともかくアイネイアースはあるときから父親と暮らしたはずで、やがてこれは陥落したトロイアから老いた父親を背負って脱出する、「孝行息子アイネイアース」の像に発展する。

女神と人間から生まれた第三の男メムノーンは、トロイア王家出身という縁で、アイネイアースと関連がある。メムノーンの両親は、女神である「エーオース＝曙」と、トロイア王家の一族であるティートーノスである。ティートーノスはラーオメドーンの子供、すなわちプリアモスの兄弟であるから、アイネイアース

よりも、もっと王家の本流に近い（こういう系譜に意味があるならば）。

エーオースは、ティートーノスのそば、そのベッドより立ち上がった

は、「夜が明けた」を意味する叙事詩の定形句の一つで、『イーリアス』と『オデュッセイア』で一回ずつ使われている。⁽²⁷⁾これを字義どおり解釈すれば、この二人はいまなお、一緒に仲よく暮らしていることになる。

いま一つ有名な定形句

薔薇色の指もてるエーオース

と並べると、何とはなしに「女神にさらわれた幸せな男」の話が想定できる。

しかしこの静的な絵に、動き、ないしは時間の経過が加わると、ティートーノスは幸せでなくなる。女神がゼウスに対して、自分の恋人の不死を願ったものの、そのとき愚かにも、不老は願うことを忘れてしまったために、ティートーノスは老いていくばかりで死ぬことができない。⁽²⁸⁾エーオースも神であることに目をつむれば、この話に、グリムの「三つの願い」のような、「神への浅はかな願いと失敗」という、民話のモチーフがあると解釈することも許されよう。

年老いて醜くなった男を見たくない女神は、その声だけを聞くために男を箱に閉じこめたという。してみると、この二人の結びつきの場合も、決して幸せではなかった。このエピソードはやはり先に記した『アプロディーテーへの讃歌』の中で、アプロディーテーが列挙する（他の例はゼウスに愛され連れ去られたガニメデーデースである）、神々に「愛された」（何と迷惑な愛よ、とも言える）トロイア王家の事例として挙げられている。

どうしてそう考えられるにいたったか理由はわからないが、「曙の女神は男を愛さずにいられない女」と設定されていた。エーオースが、狩人、ないし楽器をもった若者を求めて追いかけており、若者のほうは求愛を避けて逃げている情景を描いた壺絵は数多い⁽²⁹⁾。エーオースの恋人のうち、名が残っているひとはクレイトスである。またケパロスがエーオースにカドワカされた話は、アテーナイで広く流布している神話であった⁽³¹⁾。

もうひとり有名なのは狩人オーリーオンで、彼との情事の不幸な結果は、「人間の男を愛した女神に向けられる神々(当然、男の神々である)の嫉妬」の事例として、女神カリュプソーが、いままた自分の恋人オデュッセウスを引き離しかかる神々に向けた恨みごととして引いている⁽³²⁾。この恨みをペーレウスとテティス(やはり「恨み」があった)、アンキーセースとアプロディーテー(「後悔」があった)に重ね合わせれば、どうも女神と人間の男の間に「情事」はあってはならない不自然なことであると、ギリシャ神話体系の大枠(「イデオロギー」?)⁽³⁾が、定めていたのかもしれない。だからこそティートノスも死ぬよりも惨^{ちぢ}い目にあわねばならない。もっとも男神の子を身ごもった人間の女も、セメレー・ダナーエ等々、不幸な目にあうことが少なくないから、男女を通じた、神と人間の間の「アパルトヘイト」を考えるべきか。

さてエーオースとティートノスの間に生まれたメムノンであるが、アイティオペス(エティオピア人)の王ということになっている。エティオピア人は、『イーリアス』や『オデュッセイア』がふれている記述によれば、神々が単独で、あるいは一団となって訪れて食事を共にする、神に近い幸せな種族である。その住まうところはオーケアノスの流れに沿ったところ、ギリシャを世界の中心におけば、地の果て、ただし、

今日のエティオピアの方角ではなく、おそらく朝日の昇る方角、東の彼方だったであろう。⁽³³⁾

ホメーロスの「夜が明けた」を意味する定形句（の変化形？）には、先に挙げた句の他にも、

サフラン色の衣を着たエーオースは、オーケアノスの流れから、立ち上がった

というのがある。⁽³⁴⁾これが、「東の果て」から「曙」が昇ることを「ありのまま」述べた表現と考えれば、この「定形句」はティートーノスもエティオピアも、いまだ一切、抜きにして成り立っている、描写主体の古い形ということになるけれども、その逆に、この表現は定形句を意図して改変したもので、何も言わずともティートーノスやらエティオピアやらが前提になっていて、それらを読み取ることが期待されていると考えることもできる。⁽³⁵⁾いずれにせよ「定形句」からは、果てしなく遠い東の彼方の地方は想像させられるが、そもそも、「トロイア王家」の一員が、どうしてエティオピアの王の父親になりえたのかは、何も分からない。ティートーノスはエーオースによって、東の彼方へさらわれていったとでも想定するのか。おそらく本来、別個に成立していたいくつかの神話（東の果てに住む種族であるエティオピア人の話＋エーオースと恋人の話＋エーオースの子供のメモノンがトロイア戦争に加わる話、等々）が次々に混淆したのであるが、もはやその混淆の道筋は、残された「作品」からはたどれない。

アキッレウスとアイネイアースが、ギリシャとローマの大叙事詩の主人公として不滅の名声を残したのに比べメモノンは、今日に残る作品を見る限りそれほど有名ではない。とはいえ彼は、ギリシャ神話全体の中では決してマイナーな人物ではない。トロイア戦争をめぐる「叙事詩の環」の一つで、『イーリアス』の終わったところから始まっている『アイティオピス（エティオピア物語）』はその名のとおり、アイティオ

ペス（エテリオピア人）の王MEMNONが活躍する作品であった。伝プロクロスの『アイテオピス』の梗概には、次のようなエピソードが含まれている。当該部分を翻訳すると

トロイア人を救援せんとして、エーオースの息子MEMNONが、ヘーパイストスの武具に身を固めやつて来る。テティスは息子にMEMNON（殺傷）後におこることを予言する。対決が生じて、ANTIROKOSはMEMNONに殺される。それからアキッレウスがMEMNONを倒す。エーオースはゼウスに請願して、MEMNONに不死性を与える。

ただしこの散逸した叙事詩に含まれている話はこれ以外にも数多かつたから（アキッレウスがパリスとアポローンによって殺されるのも、この叙事詩の中で、次に起きる事件である）、叙事詩全体のうちでMEMNONの占める重みは、その題名だけで判断してはよくないかもしれない。

それはそれとして、壺絵にもMEMNONはしばしば登場する。とりわけアキッレウスとの決闘は、好まれた題材である。⁽³⁶⁾ピンド罗斯はアキッレウスの敵として、五度にわたって言及しているが、この回数はヘクトールよりも多い。また伝プロクロスの梗概では、MEMNONは単にANTIROKOSを殺すとしか書かれていないが、そのいきさつはピンド罗斯『ピューティアー競技祝勝歌第六』に詳しい。ANTIROKOSの父親NESTORは、パリスに馬車の添え馬を射られ、身動きがとれなくなる。そこをMEMNONに襲撃される。危ういところを息子のANTIROKOSが応援に駆けつけ、父NESTORは脱出させるが、自身は落命するのである。ただしピンド罗斯の力点は親孝行な息子を称えることにあるから、MEMNONは「敵役」である。現存する悲劇「作品」にはMEMNONを扱った作品は見当たらないが、散逸してしまつた悲劇のいくつか

で、メモノーンは重要な役割を演じた。とりわけ興味深いエピソードは、アイスキュロスの『魂の重さ較べ』という名の悲劇である。⁽³⁸⁾ プルータルコスは次のように伝えている。

「ホメーロスの言うところでは

『ゼウスは苦しみをもたらす死の運命を二つ、天秤にかけた。すなわち一方はアキッレウスの運命、もう一方は馬を馴らすヘクトールの運命である。そしてその中央を支えて重さを量った。ヘクトールの運命の日が傾き、ハーデースへと去って行くとした。ポイボス・アポローンは彼を捨てた』
 『イーリアス』第二二卷二一〇行以下)

けれども、そのゼウス像をもとにした話には、アイスキュロスは一編の悲劇全体を割いたのである。これには『魂の重さ較べ』という題名が付いており、ゼウスの天秤の片側にはテティス、もう片側にはエーオースと、相戦っている息子たちのために願いをかけている二人の女神を立たせた。」

(『若者は如何にして詩の朗読を聞くべきか』二一、一六F)

これにポルックス四、一三〇の記述

「スケーネー上方にあるテオロゲイオン(神の語る場所)から、神々は高く姿を現す。『魂の重さ較べ』におけるゼウスや彼を取り巻く神々のように」

を合わせると、「ゼウスが劇場のテオロゲイオンに登場して、メモノーンとアキッレウスの魂を天秤にかけ、どちらが死ぬべきであるか、決しようとする。その両脇にはメモノーンの母エーオースと、アキッレウスの母テティスが位置して、それぞれの息子の命を救ってくれるようにと嘆願している」場面が、この劇の中に

あったことが想定できる。

ただし本当にこんな「絵画的場面（見事なシメトリ―!）」が悲劇で表しえたか、そもそもアイスキュロスの時代の劇場でテオロゲイオンが活用できたのか、疑わしいのであるが、ここでは深入りしない。⁽³⁹⁾ 要は、対決する二人の英雄がともに女神の子供であり、さらに（プルートアルコスでは言及されていないが、伝プロクロスの梗概どおりとすると）ともに神ヘーパイストスの手になる武器に身を固めており、両者の勝敗の決着はゼウスの天秤によったことである。そしてこの「似た者どうし」の対決の神話が、アイスキュロスよりも以前にさかのぼることは間違いない。ゼウスが二人の英雄の「ミアアチュア」を天秤にのせ、その両脇に二人の女神がひかえている「黒絵式陶器」（紀元前五四〇年頃）がある。⁽⁴⁰⁾

「ヘーパイストスの武器」は、元来、いかなる攻撃からも身を護ってくれる「不死の武器」だった可能性がある。とすれば、それをまとった者どうしの対決からは、「矛盾」なる言葉の来歴を物語る故事を思わせる、字義どおりの「矛盾」が生じたはずである。そこでこの「矛盾」の回避のために、二人の運命の「軽重」を測ること（「天秤」のモチーフ）と、実際に武器を脱がせることの二重の操作が必要となる。後者について言えば、『イーリアス』第一六巻、巻末で、「アキッレウスの武器」をまとめてアキッレウスに成り代わり出陣したパトロクロスがアポローンとヘクトールとに殺される際に、まとっている武器がはずれおち、パトロクロスは裸にさせられてしまうが、この「武器はずし」の背景に、「ホメーロスの『イーリアス』では意図的に削除されているメルヒェン・モチーフ「不死の武器」の存在を読み取るうとする説のあることを思い出させられる。⁽⁴¹⁾

「女神の子供どうし」という設定には、「不死の武具」のような論理矛盾はない。人間の血を父親から受けている以上、そもそも不死身ではないのだから。しかし「不死なる」母親が「我が子の死」を悲しまねばならないという逆説的設定は、このような対立で最もあらわになる。ゼウスが二人の「運命」を天秤にかけ「魂の重さ較べ」をしたのは、武具を脱がせる根拠であるとともに、一方の母親に女神に、彼女の「不死性」よりも強い「定め」を如実にあらわして、納得させるためである。

プルートウスは「天秤」のモチーフの起源を『イーリアス』の記述に求めているが、メモノン対アキッレウスの決闘と「天秤」は不可分であって、アイスキュロスよりも古いことはもちろん、『イーリアス』よりも古かったであろう。それどころか、「いたずらに我が子の死を阻止せんとする女神」はメモノンの母としてのエーオースに端を発し、「我が子の死を察知するが何もできず、ただ悲しむ女神」としてのテイスの原型は、エーオースに求められるかもしれない（後述する「新分析論」の立場からは、この決闘もまた、『原アイティオピス』のモチーフが『イーリアス』に入った箇所に例に数えられる⁴⁸）。

ただし「死すべき我が子」を悲しむエーオースと、愛人を「不死」にしたものの「不老」を忘れ、箱に閉じ込めるエーオースとは、あまりに違っている。二つの「物語」は別個に出来上がったものだろう。後者は、「何をしでかすか分からない、気まぐれな神」を、人間の観点にたって見る「民話」にふさわしいが、前者には、エーオースもまた一人の登場人物として扱う「叙事詩的精神」の始まりを想定しなくてはならないだろう。別の言い方をすれば、「曙にさらわれた若者の話」と「曙の国から来た戦士の話」はともに単純な発想であり、したがって古いモチーフであろうが、「息子の戦死を悼む曙」となるとそうではない。

この、女神の子供どうしの対決から連想がいくのは、『イーリアス』第二〇巻で描かれた、アキッレウスとアイネイアースの決闘である。女神と人間の男の子供はたった三人しかいないのに、その中で二組もの決闘が生じるのは偶然とも思えない。そこでアキッレウス対アイネイアースの決闘も、アキッレウス対ヘクトールの決闘同様、アキッレウス対メムノーンの決闘をモデルにして作られたのではないかとする推測が生じる。しかも対ヘクトールの決闘の場合には、たんに『イーリアス』で用いられる「天秤」のモチーフの起源を求めるにすぎないが、対アイネイアースの場合には、「女神の子供どうし」の対決そのものが、『原アイテイオピス』にアイディアを求めたと考えるのである。⁽⁴³⁾ただしメムノーンはアキッレウスに殺されるけれども、アイネイアースは生き残る。

『イーリアス』の筋の展開に従えば、パトロクロスの死後、戦線復帰したアキッレウスに向かう敵はない。にもかかわらずアイネイアースは決闘を決意する。ここで彼はアキッレウスに対して、アキッレウスが神の血筋をひくことを誇りとするなら、自分とてやはり女神の子供であることに変わりがない、と宣言する。⁽⁴⁴⁾「女神の子供」は自恃の念のよりどころを与えるとともに、二人がある意味で「対等」であることを保証する。アイネイアースはこうも言う。⁽⁴⁵⁾

二人の母親のうちいづれかが、我が子を嘆くことになろう、

今日という今日には。

実際にはそうならない。そもそも、こうしたパセティックな調子は、ここでの対決全体の叙述の調子にふさわしくない。この言葉はむしろ、メムノーン向きである。

アイネイアースが語る彼の一族の系譜は、『アプロディーテーへの讃歌』一九二行以下でアプロディーテーがアンキーセースに語る、神々がトロイアの一族に与えた、一連の恩恵の紹介と一致している。しかも『イーリアス』第二〇巻のこの決闘部分と『アプロディーテーへの讃歌』との一致はこれだけにとどまらない。双方で語られる予言によると、アンキーセースからアイネイアースに続いていく一族が、プリアモス・ヘクトール一族の滅亡後、トロイア人を統べる王を出すことになっている。⁴⁶さすがにローマの建国こそ言及されてはいないが、まるで将来、そのように神話が展開することを予想するかのようである。将来をことほぐ『讃歌』ならばともかく、トロイアの陥落と滅亡を強く暗示させている『イーリアス』では、この予言の存在は少なからず不可思議である。

奇妙なことはこれだけではない。『イーリアス』でこの予言をしているのはポセイドーンである。ポセイドーンは『イーリアス』の他の箇所ではあからさまにギリシャ軍の味方をしているのに、それにもかかわらずこの決闘に際しては、アキッレウスではなくアイネイアースの側にたっている。そして危機に瀕したアイネイアースを、霧に包んで救い出してしまふ。なぜポセイドーンがアイネイアースをひいきにするのか、その理由は『イーリアス』を読んだだけでは分からない。

アイネイアースは『イーリアス』第五巻でも、霧に包まれて救出されている。⁴⁷この時の救出者は母親アプロディーテーと、トロイア・シンバのアポローンであるから、筋のうえで無理はない。決闘の相手はディオメデースで、第五巻はディオメデースの活躍を描いた『イーリアス』全体からはやや独立した箇所である。ディオメデースの武勇を際立たせるためにはそれなりの相手が必要で、そこでアイネイアースが選

ばれたのかもしれない。

しかしアイネイアースがいかに危うくとも倒されないことそれ自体は、奇異でないとも言える。だいたい『イーリアス』にあって、「大物」どうしが決闘すると、その決闘は決着がつかないまま不発に終わることにきまっている。「大物」は簡単に死んではならない。いいかえれば「大物」が殺される場合、その事件は単にエピソードにとどまらず、『イーリアス』の本筋としての「アキッレウスの物語」の進行に関与している。サルベードーンしかりパトロクロスしかりヘクトールしかり（ちなみにパトロクロスは『イーリアス』の中で、唯一、死んでしまう「大物」ギリシヤ人である）。『イーリアス』の緊密な構成は、本筋からは余計な、「大物」の死を省いているのである。

「大物」どうしの決闘を不発にする叙事詩の技法は二つ考えられる。一つが神々の介入（霧に包まれ戦場から連れ去られる）であり、もう一つは互いに相手の力量を認めあつたあとの決闘中止の合意である。前者には先に挙げた箇所のほかに、第三巻のメネラーオスとパリスの決闘（ここでもアプロディーテーがパリスを救出する）があり、後者の代表例には第七巻のアイアースとヘクトールの決闘がある。奇妙なことにこの第七巻の決闘にあってヘクトールは圧倒的に劣勢であつて、そのままアイアースに倒されても、あるいはそこで神々の介入があつて霧に包まれて救出されたとしても、まったくおかしくない筆の運びである。にもかかわらず土壇場で合意が成立する。ひょっとすると、真に対等の力量で進んで行く決闘を描写する言葉を、ホメーロスはもたなかったのかもしれない。

『イーリアス』の諸部分に、制作の前後関係、手本と写しの関係を探る立場に立てば、これらの決闘の間

には一連の派生の系図が描かれるはずである。しかし一人の作者の意向が隅々までいきわたっていると考えるのであれば、これらは型（それがいまは姿を残していない「祖型」か、それとも現実には姿をとらない「理念型」かはここでは細かく問わないことにして）と、諸ヴァリエーションとなろう。

『イーリアス』の中でのアイネイアースの立場はどういうものか。

『イーリアス』にでてくるトロイア方の人物で、戦闘に参画しうる年令の男のうち、ある種の特性をもって描かれている者は数多くない。ヘクトールとパリスはプリアモスの息子を代表しており、そしてこの二人は、夫にして父、それに対するプレイボーイ、責任感に対する軽薄、実直さに対するきらびやかさ、要は「賢い兄と愚かな弟」として対立する枠組が設定されているのだが、それ以外の息子たちは、もちろん、名前を挙げて描写されるけれども、ギリシャ軍ほどに個性をそなえた存在とは言えない。あとは援軍で、そのうちサルペードーンはパトロクロスに殺される。そしてアイネイアースである。

アイネイアースは援軍ではない。彼はトロイアの一族である。しかし第二〇巻のアキッレウスとの決闘の際にアキッレウスがアイネイアースに投げた言葉は、おまえはトロイアを心底、防衛する必要はない、いくらおまえが働いたとてプリアモスには息子が多いのだから、と、まるで離反を唆しているかのような口ぶりなのである。⁽⁴⁸⁾ 事実アイネイアースが、自分は正当に評価されていないと、プリアモスにたいして忿懣をいだしていることが、第一三巻で事のついでのように記されている。⁽⁴⁹⁾

さらに第三巻、トロイアの老人たちが一同、城壁の上に会する場面で老人たちの名前が列挙されるのだが、

そこにはアイネイアースの父親アンキーセースの名が見当たらない。第二〇巻での系図をもとにすれば、なるほどブリアモスとアンキーセースとはさほど近い血縁とは言えないけれど、しかし十分、親戚というにふさわしい関係である（松平千秋教授の表現を使えば「本家と分家」となる）。

もしブリアモスとアイネイアースの間の確執が、『イーリアス』以前に出来上がっていた神話と考えるならば、第一三巻や第二〇巻の表現は、それに基づいているものの、ただしここではそれ以上、ホメーロスが深追いすることがなかったテーマであると解釈されうる。とすればいったいアイネイアースは「トロイア戦争物語」の「発展史」のどの段階で、参入してきたのであろうか。

先にふれたように、トロイアを守って戦うのは、ブリアモスの息子たちと、小アジア各地から馳せ参じた援軍である。ブリアモスの息子は、比較的、現実離れの要素を避ける『イーリアス』の中ですら、五〇人もいたことになっている。しかも彼らはみな、ブリアモスの王宮の中に住んでいた（ちなみにブリアモスが「ハーレム」を擁していたとは思えない）。さらには娘たちも、その婿ともども王宮の中にいる。

こうした王宮の姿は、『オデュッセイア』の中で言及される風の神アイオロスを思い出させる。⁽⁵⁰⁾ アイオロスの六人の息子と六人の娘は、近親相姦で一族を構成していた。ブリアモスの一族に近親相姦まで想定することは無論ないけれども、元来、『イーリアス』にモデルを提供した「民話」段階では（そういうものがあるとして）、この一族は文明世界の外側にある、堅固な守りで固められた要塞の中で一団となって住んでおり、息子の一人がそこからギリシャ世界に侵入してきて、女をさらっては、閉じこもってしまうような存在だったかもしれない。

もしこういう異界の一族であったならば、五〇人の息子たちはその数からみて、父親のもとに統率がとれた、ある種の均一性をもった一群であったはずである（当然、そこにはヘクトールのような人物がいる場所はない。ヘクトールの「創作」は、かなりあとのことになる）。そして話をおもしろくするために「敵」に変化をもたせるならば、一つは息子一人一人に各種の異様な能力を分担させ、「対決そして退治」のやり方を多様にするか、いま一つのやり方は、「個性」豊かな援軍を登場させることであろう。

アイネイアースはそのいずれでもない。彼は息子の枠外にいるけれども援軍でもなく、いかにも中途半端な位置を占めている。したがって彼の登場は、こうしたプリミティブな物語からもっと後の段階であろう。アイネイアースの子孫を自称する（歴史上の）王家が、自分の祖先を「トロイア戦争物語」（必ずしもそれは『イーリアス』でなくてもよい）に割り込ませたという説が、それなりに説得力をもつのは、こうした物語の構造上の「落ち着きのなさ」を説明しうるからでもある。

「歴史的わりこみ」ではなく、純粹に物語の枠組のなかだけでアイネイアースの登場の意義を求めれば、ポセイドーンの言うように（『イーリアス』第二〇巻三〇三行以下）、陥落から生き残る血筋が必要だったからとなろう。血筋である以上、援軍では困るわけだし、プリアモスの息子の一人（つまりパリスの兄弟）では、「トロイア王家の罪と罰」を共有してしまうことになり、やはりまずい。そこで「分家」の登場である。「ゼウスはプリアモスの一族を以前から憎んでいる」（同三〇六行）のだから。

何の根拠も提示できないが、不和の理由に関する推測を一つ。今ある『イーリアス』でパリスを叱責するのはもっぱらヘクトールの役割になっているが、ひよっとするとアイネイアースは、プリアモスないしパリ

ス（プリアモスの一族）を諷めるものの、かえってその諷言ゆえに不和を生じさせ、不当にもプリアモスから排斥される役割を担っていたのかもしれない。もしそうであれば、アイネイアースとプリアモスとの確執は、ヘクトールが「創作」される以前の古いモチーフとなる。

話が出来る過程のうえで、アプロディテーの「情事」と、アイネイアースの母親が女神とされるのと、どちらが先であつたろうか。もちろんいったん話が出来てしまえば「情事」が「アイネイアース誕生」に先行するのは当然であるけれども、話の成立という観点からすれば、アイネイアースをトロイア陥落後も生きのびさせる背景として、彼に神の血を入れることが考え出されたとも想定できるからである。その際、父親を神とすることは、「トロイア王家の分家」という立場を維持させる限り、不可能である。

次のようなことも想像できる。父親を背負ってトロイアから脱出するアイネイアース像はきわめて古い⁽⁵¹⁾。そこでもし、彼の「トロイア陥落サヴァイヴァル」と「孝行息子」が不可分の関係にあるモチーフであつたのならば、当然、父親は最初から人間でなくてはならない。そして彼の子孫の立場から、その祖を神と結び付けようとするならば、通常のように男神ではなりたたないのである。そこでトロイアの味方で、かつセックスを「職掌」とする女神が呼び出される。

『アプロディテーへの讃歌』は、「情事」の理由として、いつも他の神々を恋に陥れて笑っているアプロディテーに対する、ゼウスの報復というモチーフを持ち出すけれど⁽⁵²⁾、これがこの神話におけるそもそもの理由であつたとは思えない。ゼウスの計略はいわばオールマイティな理由づけである。それよりも「青年」アンキーセースとアプロディテーの出会い、例えばアドーニス⁽⁵³⁾の神話のような、「女神に愛される

「若者」という類型のあらわれと捉えるべきか。⁵³⁾

しかし話の流れとしてこの類型に属することは認めても、その結果、女神が身ごもり、しかもそれを後悔するというのは類型をはずれている。むしろこの類型により近いのは、エーオースとティートーノスの組み合わせである。『讃歌』の中ではティートーノスの話が範例として引かれるが、実際にはその逆に、アプロディーテーとアンキーセースの情事のいきさつは、エーオースとティートーノスをモデルにして作られた物語であると考えたほうが、よいかも⁵⁴⁾られない。

アイネイアースとメモノーンの考察はこれで切り上げて、ここで再びアキッレウスに戻りたい。『イーリアス』に描かれる以前、民話レベルでの、彼の戦場での活躍のさまについて考えてみたいからである。

ギリシャ軍随一の英雄であるアキッレウスは、トロイア陥落以前に戦死する。その武勇は、さまざまな「大物」を倒すことで表される（はずである）。ところが彼が戦いから引きこもってしまふ『イーリアス』にあつては、彼の活躍のエピソードを描ける余地は少ない。なるほど彼はヘクトールを殺す。しかし今更いうまでもなくこの勝利は、いわゆる「民話調」の「活躍に続く大活躍」から、はなはだしくかけはなれている。「一部を残して不死である英雄」にふさわしいのは、もっと単純な、心の内側を向く目とは無縁な活躍である。ひよっとすると第一〇巻『ドロネイア』や、第五巻のディオメデースの活躍は、アキッレウスの「変容」を代償しているのかもしれない。

現行『イーリアス』にあつて、多分、アキッレウス「本来」の姿を比較的、残しているのが、第二二巻の

スカマンドロス河との対決である。アキッレウスの残酷さに腹を立て（ただしこの立腹は、その原因となる、先行するリュカーオン殺しが「アキッレウスの怒り」のテーマと不可分であるから、今ある『イーリアス』の叙述に沿っての展開であろう）、トロイア人を守るために「河」は実際の水の流れにアキッレウスを巻き込んで溺れさせようとする。このような通常の戦闘とは話の次元を異にする、あえて言えば「非リアリズム」は、『イーリアス』のアキッレウスに宇宙的壮大さを加えんがためと解釈することも不可能ではないけれども、むしろ古い「民話的色彩」を残しているためとも言えなくなろう。

そしてこの河との対決に先立って、アキッレウスはアステロパイオスを討つ。この男は祖父がやはり「河神」（なんとマケドニアのアクシオス河）であり、いま、この男に勇気を吹き込んでいるのもやはり「河神」（トロイアのスカマンドロス河、別名クサントス河）なのである。

アステロパイオスは両手で二本の槍を同時に投げることのできる、異様な勇士である。しかもその一本はアキッレウスを傷つけ、他の場面では一度も血を流したことのないアキッレウスもここではついに血を流す。スカマンドロス河に溺れそうになって神々に救助を求めるところと考え合わせれば、アステロパイオスとスカマンドロス河は、元来一つであった（例えば最初は人間の姿をとっているけれども、窮地にたつと「河」本来の姿に戻る、といった類たぐいの）、妖怪じみた、アキッレウスの敵であったかもしれない。

このアステロパイオスを倒したあとのアキッレウスの豪語も興味深い。彼は自分の父親ペーレウスの祖もさかのぼればゼウスにたどりつくのであり、そのゼウスには諸河の長アケロイオス、あるいは大地を囲むオーケアノスの流れすら服従すべきものであると、先祖の優劣が当然のことながら子孫の優劣に反映すると

の考えを、父親の血統と関連させて披瀝する⁽⁵⁵⁾。これをいまある『イーリアス』の中に位置付けして解釈するのは、私の本意ではない。指摘しておきたいことは、アキッレウスが「民話の主人公」のように「単純」になれば、女神である母親には言及しないことである。

もともとアキッレウスは、各種各様な敵を、次々と討ち取ったことであろう。ホメーロスが『イーリアス』を「完成した」あとの時代になっても、アキッレウスの名声は、何もパトロクロスやヘクトールとだけに結びついているわけではない。

例えば神ポセイドーンの息子のキュクノスである⁽⁵⁶⁾。ピンダロスはアキッレウスの武勇を具体化するに際して五か所でメムノーンに言及するが、そのうち二か所では、ヘクトール・キュクノス・メムノーンの順で『オリュンピア―競技祝勝歌第二番』、あるいはキュクノス・ヘクトール・メムノーンと『イストミア―競技祝勝歌第五番』、キュクノスがヘクトールやメムノーンに匹敵する「最大の敵」であったことは自明であるかのような書き振りで、三人の名をセットにして並べている。またアリストパネース『蛙』の中でも、キュクノスとメムノーンが、対になってひかれる箇所がある⁽⁵⁸⁾。

伝プロクロスの梗概は、キュクノスのエピソードが「叙事詩の環」の『キュプリア』にあったことを伝えている。キュクノスはメムノーン以上に「不死身」で、文字どおり「刃がたたず」、アキッレウスは首を絞めて窒息させなくてはならなかった（あるいは「頭に石をぶつけた」後述）。ただしプロクロスが記すのはキュクノスの名のみであって、今日まで残存する作品からディーテールを知ろうとすると、オウィディウス『変身物語』（第一二巻七〇行以下）に頼らざるをえない⁽⁵⁹⁾。

とはいえ、キュクノスが「刃のたたない身」であったにもかかわらずアキッレウスに殺された神話そのものは、すでに古典期のギリシャ人の常識であったはずである。なぜならアリストテレースは『弁論術』エンテュメーマ（省略推論）の項で（第二巻二二・一二、一三九六b一六）、アキッレウスを除いて他の誰にもあてはまらない、アキッレウス固有の命題の例として、「ヘクトールを殺したこと」と並べて、「ギリシャ人の上陸を阻んだ、刃がたたない身のキュクノスを殺したことを挙げているのである。キュクノスが何者であるかを知らない人間がいたとすると、アリストテレースの「講義」は、根底から崩れ落ちる。

『キュプリア』の梗概には、キュクノスが不死身であったとは書かれていない。しかし『キュプリア』は、『イーリアス』が排除した、魔法の話やら、民話風の奇怪な話を多く含んでいたから、梗概では省略されてはいても『キュプリア』そのもので、不死身であった可能性は十分、考えられる。

ここで「刃がたたない身」と訳した単語 (*ἀσπίτος*) は、厳密に言えば「外傷を受けることのない」の意であるから、それをアキッレウスが殺すには「首を絞め窒息させる」以外、他の方法は考えられない（火で焼いたり水に溺れさせたり穴に埋めたりするのは、戦場での対決には不向きである。毒殺は論外である）。とすればこの殺し方そのものも、オウイディウスの発明というよりも、元来キュクノスの名前と切り離せない、この神話に不可欠なモチーフであろう。「不死身の定義」の間隙を縫って「不死身の怪物」を倒すのは、「謎解き」にも通じる「民話」が好む題材である。先に挙げた「体の一部を残して不死身である英雄」を思い出されたい。

もっともアポロドーロスの『摘要』（三、三一）では、アキッレウスは石をぶつけてキュクノスを殺して

いる。⁶²「傷つかない」という「定義」がゆるやかに解釈されて、「武器」さえ使わなければ条件を満たすと考
えられたからであろう。とすればもともと殺しの手段は「石」とされていたのが、「定義」によりふさわし
い、緻密な解が求められた結果、「首絞め」が案出されたとする推測が正しいかもしれない。⁶³

古典期にキュクノスが「有名」であったのは、悲劇のおかげとも考えられる。とはいえ先に挙げた『蛙』
の一節は、アイスキュロスがキュクノスを自分の悲劇のどれかで登場させたことをうかがわせるが、この言
及以外、キュクノスの名前は、今日にまで伝わる「断片」を含めても、どこにも見当たらない。⁶⁴ソポクレ
スは、唯一（サテュロス劇？）『ポイメネス（牧人たち）』の中で、キュクノスを登場させている。この中で
キュクノスは「青銅も鉄も身体を傷つけない」（断片五〇〇）と描写されているが、実際にどのような殺さ
れたかは不明である。その一方、エウリーピデースにはいっさい、キュクノスへの言及は見当たらない。⁶⁵
すれば察するに、悲劇の題材としては主流ではなかったようである。『キュプリア』の影響はむろん否定で
きないが、むしろこの神話には、古くから伝わった、長い伝承を想定すべきだろう。

先に『イーリアス』第二〇巻のアイネイアースとアキッレウスの決闘で、ポセイドーンが常とは異なり、
トロイア人の味方をするこの不思議さに言及したが、ひょっとするとキュクノスが『キュプリア』でポセ
イドーンの息子とされていることも少しは関係があるのかもしれない。もともと「アキッレウス伝説」の
中で、ポセイドーンが「ある場合には」アキッレウスに敵対する役割を担っていたとすれば、ホメーロスが
アイネイアース救出者としてこの神を登場させるのも、無理ないことになる。

話の単調さを避けるためには、敵が同じような姿をしていないほうがおもしろい。女（アマゾーンの女王

ペンテシレイア)や美少年(トロイロス)がアキッレウスの相手であったことも、敵のヴァリエーションという角度から見ることでもできるだろう。⁽⁶⁶⁾そして「東方の王」であり「曙の息子」メムノーンも、その一環と見ることができる。

アイティオベスの語源は、ギリシャ語で「顔の日焼けした」として説明しうる。なるほど壺絵を見る限り、メムノーンはアキッレウスと同じような姿で描かれており、特に異なった点はない。しかし元来、この名で指された種族が「黒人」であった可能性は否定できない。⁽⁶⁷⁾

ヘーラクレースの「一二の功業」のように、アキッレウスにも、尋常ならざる敵が次々と襲って来たと考えたらどうであろうか。当然のことながら、敵に変化をもたせようとすればするほど、話は「荒唐無稽」になりがちである。しかし敵の一人、「曙の子」メムノーンの死を阻止しようとして聞き入れられず、その死を悼むことになる「母親」の姿が描かれたとき、「民話」は「叙事詩」に変容しはじめた。さらに「敵」メムノーンにつづいて、アキッレウス自身、死すべき者としての側面が強調されるようになった。その成功をふまえて、叙事詩『イーリアス』が誕生したのである。

先にメムノーンが、アイネイアースのモデルになっているのかもしれないという仮説に言及した。『イーリアス』第二〇巻のアキッレウス対アイネイアースの決闘が、アキッレウス対メムノーンの決闘にならって考案されたというのである。このように、アキッレウスとメムノーンの対決・メムノーンの死・さらにアキッレウスその人の戦死の物語が、現行の『イーリアス』の下敷になっているとするのが、『イーリアス』

の成立について緻密な論を展開する研究者のグループ、「新分析派」の考え方の骨子である。⁽⁶⁸⁾

この『イーリアス』に先行する物語を『原アイティオピス』もしくは『メモノーニス（メモノン物語）』と呼ぶ。実際に「叙事詩の環」に位置づけられる、アルクティノスによって書かれ（語られ？）散逸した『アイティオピス』は、『イーリアス』が出来上がってから作られたと考えられるから、そのもとになった話の意で、『原』アイティオピス』と呼ぶのである。

本稿は「新分析派」の考察に頼るところ少なくないが、『原アイティオピス』の存在はあまり厳格に考えずにおきたい。『原アイティオピス』の姿はアルクティノスの『アイティオピス』（の梗概）その他をもとにして推測するしかないわけだが、そのアルクティノスの『アイティオピス』は当然、『イーリアス』をモデルにして作られた部分もあるはずである。すなわち『アイティオピス』（メモノン）関連のモチーフを『イーリアス』との関係において、どちらがどちらに影響したかを考えようとすると、岡道男教授の労作が示しているようにきわめてデリケートな手続きが必要である。そこで大雑把は承知のうえで、次のような諸「神話」は『原アイティオピス』に含まれていたと仮定するところから出発する。⁽⁶⁹⁾

- a アキッレウスがペンテシレイアを殺す。
- b 窮地に立ったネストールを、その息子アルキロコスが助ける。しかし代わりに自分がメモノンに殺される。
- c アルキロコスの仇を、アキッレウスが討つ。
- d エーオースが我が子メモノンの死を悼む。

e アキッレウス自身が、パリスとアポローンに殺される。

f アキッレウスの死体を、アイアースとオデュッセウスが守る（のちの二人の「武具争い」の伏線）。

g アキッレウスの葬儀と、葬礼競技が催される。

h アイアースとオデュッセウスとの間に生じた「武具争い」と、それに続くアイアースの錯乱と自殺。

この物語はプロクロスの梗概ではレスケース作『小イーリアス』に属すと記されているが、「神話群」の関連から見れば、むしろここに挙げたほうがよいのかもしれない。いずれにせよ本稿の趣旨には関係しない。⁽⁷⁰⁾

アンティロコス↑メモノン↑アキッレウスという殺しの連鎖が、『イーリアス』のパトロクロス↑ヘクトール↑アキッレウスという殺しの連鎖と平行関係をなしている一方で（bおよびc）、『イーリアス』の中のパトロクロスの死と葬儀は、明らかにアキッレウスの死と葬儀を暗示している（eおよびg）。さらにはパトロクロスに殺されるサルペードンにもメモノンの影が見て取れる（cおよびd）。つまり『原アイテオピス』が『イーリアス』のモデルとなったといっても、照合関係は単純ではない。

そして次に並べた『イーリアス』の箇所は『原アイテオピス』にモデルがあると考えると、たしかにうまく説明がつく。これらの一つ一つは必ずしも『原アイテオピス』なくしても成り立つかもしれないが、上述した大枠の照合に加えて、累積的に説得力をもつものである。

①第八卷八〇行以下、ネストールは馬車の馬をパリスに射られ、そこをヘクトールに襲われるが、ディオメーデースによって助けられる。ヘクトールの凄まじい襲撃。ヘクトールはメモノンの、ディオメーデー

スはアルキロコスの代わりか (b)。

② 第二二卷二〇八行以下、ゼウスはヘクトールとアキッレウスの「運命」を天秤にかけて測る。「天秤」のモチーフは、メムノーンとアキッレウスの場合のほうが、より具体的に関連している。これについてはすでに一二三ページ以下で述べた。

③ 第一六卷六六六行以下、パトロクロスに殺されたサルペードーンの死体は「眠り」と「死」によって、故郷のリュキアに運ばれる。こうした「超人間的」弔いは、『イーリアス』の他の英雄にはみられない。一方、メムノーンの死体を「眠り」と「死」が運んでいる壺絵がある。⁽¹⁾『イーリアス』ではアポッローンがサルペードーンの死体を清めてやるが、これはエーオースがメムノーンの死体を清めるのに基づいているのか。この仕事は母親にふさわしい (d)。

④ 第一一巻三七三行以下、ディオメデースはパリスによって、足を矢で射られる。ディオメデースはアキッレウスの代わりか (e)。

⑤ 第一六卷七八八行以下、パトロクロスの死。パトロクロスはまずアポッローンに両肩をつかれる。兜が落ち、武具がはずれ、目がまわる。そこをそれまで無名同然のエウポルボスなる男が槍を投げて (突いたのでなく)、傷つける。エウポルボスは味方の中に逃げ込む。ヘクトールがかかってくるのはこの先である。なぜエウポルボスなのか。この「卑怯な」男はパリスの代わりか (e)。

⑥ 同じく、パトロクロスの武具はアポッローンによって落とされ、裸になった。しかし第一七卷一二五行でヘクトールは、パトロクロスから武具を「はぎとっている」。第一六卷の武具が、暗黙裡に「不死の武具」

であったとすれば（上述二二四ページ）、第一七巻では『イーリアス』の他の部分同様、普通の武具に戻っているので、神による「武具はずし」という非日常的・超人間的事件も必要でなくなっている。

⑦ 第一七巻、パトロクロスの死体を守ろうとするアイアースの活躍（f）。

⑧ 第一八巻二二行以下、アキッレウスは悲しみのあまり顔や体を煤で汚し、地面に大きく横たわる。そのまわりでは女たちが号泣する。この映像は、アキッレウスの埃まみれの死体を連想させる。またつづく同巻三五行以下、パトロクロスの死を知ったテティスは（やがて来る）アキッレウスの死を嘆く。他のネレイデスたちも泣いている。あたかもすでにこの段階でアキッレウスが死んだかのように（g）。

⑨ さらに武具をめぐる謎。アキッレウスの死後、アイアースとオデュッセウスはアキッレウスの後継者の象徴としての武具をめぐる争う。この争いおよびそれに続くアイアースの自殺が劇的であるためには、武具は当然、二つあっては困る。ところが『イーリアス』には二組の武具がある。まずアキッレウスはパトロクロスに自分の武具を着せた。その武具はヘクトールに奪われた。そこでテティスは新しい武具をヘーピストスに頼んで作ってもらうのである。元来、テティスが「ヘーピストス製の武具」を息子に与えたのは、アキッレウスのトロイア出征の時点であった。⁽⁷⁾ところがパトロクロスの「発明」によって、アキッレウスはいわば二度、死ぬことになる。そこで武具が二組、遺されることになってしまった。

⑨ 第二三巻、パトロクロスの葬礼競技（g）。

以上のような推測は、「その気になって見ようと思えばそのように見えてくる」たぐいの「類似」かもしれない。しかし『イーリアス』の「モデル」を『原アイテイオピス』と呼ぼうと呼ぶまいと、ホメーロスが、

メムノーンを参考にしながらも「民話」に近い要素を消し去って、その一方、パトロクロスを「発明」し、さらにはヘクトールも「発明」することで、『イーリアス』を「叙事詩」に高めた詩人であると、大筋で認めてもよいのではないか。⁽¹³⁾

『イーリアス』のクライマックスをなす決闘では、自分の怒りに固執したため友人パトロクロスを死なせてしまったというアキッレウスの自責の念が、ヘクトールに対する憎しみを増幅させている。さらに対立相手のヘクトールにも、全トロイアを護ってたっている悲愴感と、かつ自分が判断を間違えたという責任感が備わっている。だからアキッレウスとヘクトールとの対決は、アキッレウスとメムノーンの対決に比べ、はるかに単なる武勇の衝突以上の「文学」となっているのである。

もっともパトロクロスはともかくヘクトールまでもホメーロスの「創作」とするのは言い過ぎかもしれない。とすれば、それまで単にトロイア軍の筆頭にすぎなかったヘクトールを、今あるような姿にしたのが、ホメーロスであると考えることにしよう。

最後にこれまで考えてきたことをまとめて、以下、次のような「発展」の過程を推測してみたい。もちろんあくまでひとつの「思考実験」で、他の可能性を否定するものではない。数字は古い順を示し、同じ数字で異なるアルファベットの項目どうしの間には、依存関係がない。

1A 原始的な「トロイア戦争物語」。ヘレネーを奪ったパリステ、奪い返そうとするメネラーオス、さらに木馬によるトロイアの陥落を軸にすえていた。

1B 「アキッレウスの活躍と死の物語」。トロイア戦争を背景とする「英雄伝説」の一。アキッレウスの「存在理由」は二つあり、一つが「父がゼウスであったなら、ゼウスより強くなりえた子供」という設定で、もう一つは「体の一か所を除いて不死身」。ともに、母親がテティスであることと関係する。彼は、河神やら不死身のキュクノスやら女戦士ベンシレイアなど、さまざまな敵を倒すが、一番弱く、卑怯な敵（パリス）によって殺される。

1C 「男好きな曙（エーオース）をめぐる民話」。類型「女神に愛された少年」ないし「女神にさらわれた若者」のヴァリエーションで、東方（オリエント）起源かもしれない。

2A アキッレウスの数ある敵の一人で、元来、異形の者であったメモノーンが、アキッレウスの不死性に匹敵する不死性をもった敵となるべく、変形される。その過程で、ヘーパイストスの武器とならんで、女神の子供としての身分が確定する。

2B 「プリアモスとの間に確執があり、トロイア戦争を生き残るトロイア人」としてのアイネイアースができてくる。「孝行息子」のモチーフ。

3 『原アイテイオピス』。「アキッレウス物語」と「トロイア戦争物語」の結合の第一段階。「メモノーン物語」の完成。息子の死を予知する「女神⇨母親」の悲しみと嘆願。ゼウスの「天秤」による「矛盾」の解決。

4 アプロディーテーとアンキーセースの「情事」が、エーオースにならってできあがる。アイネイアースの系図。

5 『イーリアス』すなわち「怒りの物語」ができる。パトロクロスならびにヘクトールが「創作」され、

メムノーンは除外される。彼の役割はヘクトール、サルペードーン、アイネイアースに移される。

神々の血をひくことだけで、単なる人間よりも高貴さが増大する。そして決闘に際して優位を与えられる。ヘーラクレスにしろペルセウスにしろ、いわゆる英雄たちが、神（ゼウスを筆頭とする男の神）の胤であるとされるのは、ひとえにそれゆえである。そもそもあれほど男神が人間の女に子供を孕ませたのは、自分達の祖先を神に結びつけたいとするギリシヤ各地の権力者の要求に沿ったためといえる。

また「神の子」としての英雄は、「超人間的」色彩もあたえられる。『イーリアス』にあっても、アキッレウスの戦線復帰のおり、濠のそばに立った彼の頭には雲がたなびき、体からは炎が燃え上がり、彼のあげる大音声がトロイア勢を縮みあがらせる場面は、その典型といつてよい。⁽⁷⁴⁾

しかし「ホメーロスの『イーリアス』」にあつてアキッレウスを強烈に彩っているのは、女神の子であるにもかかわらず「自分は死ぬ」との自覚である（さらにこれが「人はみな死ぬ」に発展するが、このことはここでは別問題である）。あるいは女神の子であるにもかかわらず、人間から侮辱されねばならないことに對する憤慨である。女神を母にもつことは、むしろ孤独と隔絶感をアキッレウスに付与している。この「ひねり」は、『イーリアス』を「アキッレウスの怒りの物語」にした作者の功績であると考えたい。

もしテティスがゼウスと結婚していたなら、アキッレウスはペーレウスではなくゼウスの子供であつて、しかも父ゼウスよりも強くなつていたのだから、テティスは自分がゼウスの意向に従いアキッレウスの父親をペーレウスにしたことでゼウスにたいして貸しがある、という、最初にあげたアキッレウスの「論理」⁽⁷⁵⁾

(それがあるとして)は、今日の生物学を持ち出すまでもなく、古代ギリシャ人にも理屈にならない。テティスがゼウスの子供を生んでいたのなら、その子供はもはやアキッレウスでなくなってしまうのだから。しかしこれがアキッレウスの口を借りたテティスの「思い」だとしたら、テティスの言葉にならない恨みには形が与えられることになる。人間の子供を生んだがために、テティスは「子供を失う母親」の悲哀を味わねばならないのである。

事実このことをもっとはっきりと、アキッレウスは口に出す(『イーリアス』第一八卷八四〜八九行)。

(ヘクトールがパトロクロスを殺して奪った武具は)

あなた(テティス)を神々が死すべき人間の男の床に押し込めた、あの日、

ペーレウスに与えた見事な贈り物だった。

ああ、あなたがあのまま海の女神たちと暮らしていて

ペーレウスが人間の女を妻にしていたら、どれほどよかったことだろう。

しかし現実には、あなたにも多くの悲しみが生じさせるためであったのだ、

息子は死ぬのだから。

これはテティスその人のことばに照応する(同四二九行〜三四行)。

ヘーパイストスよ、オリュンポスにいる女神のうち、いったい誰が

これほどまでに忌まわしい悲しみを、胸のうちに耐えたことだろう、

他の女神をおしのけて私に、ゼウスがくれたこの悲しみは。

他にも海の娘たちがいたのに私に、ゼウスは人間の男をめあわせた、

あのアイアコスの子供のペーレウス。そして私は人間の男の床を耐え忍んだ、

いやでたまらなかつたにもかかわらず。

もちろん人間として生まれた子供が殺されるのを見て、悲しくなるのはなにも女神だけではない。たとえば我が子サルペードーンの危機にゼウスは手出しをしようとしますが、ヘーラーが思い留まらせる⁽¹⁶⁾。そしてここに男神と女神との差異がある。ゼウスは自ら進んでサルペードーンをもうけたのだから、その死を自分から率先して耐えねばならない。しかしテティスの場合、不本意にも子供を生まされて（ゼウスの意向と、ペーレウスの「暴力」と、両方の意味で生まされて）殺されたのだから、最後まで恨みに思うことが許される。

思えばこの場でヘーラーがゼウスを諫めて言う理屈、「もしいまここでゼウスがサルペードーンを助けたら、神々はみんな自分勝手に我が子の救出にかかりだし、秩序がなくなってしまう」というのは、現に靄を伴う救出場面がすでに何度か起こっている以上、『イーリアス』全体からみれば筋がとおらない。しかし女神から男神に言うせりふとすれば、十分に重みがある。「貞淑な」普通の女神ならば、自分の子供が人間であるはずがないから、ゼウスのような心配とは無縁なのである（アプロディーテはアイネイアースを救出しようとしてディオメーデースに傷つけられるが、そのことで「処女神」⁽¹⁷⁾）。アテーナーに厭味を言われる⁽¹⁷⁾）。

戦士社会を背景に発展した叙事詩というジャンルでは、子供を戦死させた悲しみに、榮譽を思い耐える人物だけではなく、悲嘆に暮れ号泣する人物をも登場させたけれども、それぞれを、父と母、男と女の役割に

分けて描くことで成り立って来た。そして本来、「母の悲しみ」はつとに「人間の専有」であって、神々のものではないのである。そもそもテティスが下等な神であって、オリンポスでの宴から排除されているのも、理屈にあっている。死に勝る榮譽をあげる人間を称え、自らは死を知らずして明るい神々の中には、息子の死去を予知し、悲痛な思いにさいなまれる彼女のいる場所などあってはならない。このように想像をたくましくしていくと、ホメーロスは、「女神の子」アキッレウスとトロイア戦争最大の英雄『イーリアス』の主人公」という設定を、最大限、生かしていることが分かってくる。

おそらく叙事詩というジャンルの特徴も考慮されるべきであろう。本稿の初めに記したように、ピンドロスはペーレウスとテティスの結婚を、あくまでペーレウスが勝ちとった榮譽として描いているが、これは「競技祝勝歌」というジャンルと無縁ではない。競技の優勝者を称える場では、せいぜい、栄光のはかなさを思い起こさせ思いがりを諫めることまではできても、敗者の悲しみにひたることはできない。実際、ホメーロスは『イーリアス』を、ヘクトールの遺骸を前にした三人の女の嘆きで終結させるという、思えば尋常ならざることをやりとげたが、これは叙事詩だからこそ可能だったとも考えられる。

ホメーロスは、誇張すれば、ギリシャ神話（インド・ヨーロッパ語族の神話といってもよいかもしれない）に古くから内在した「イデオロギー」に風穴をあけ、「榮譽は輝かしくそれゆえに悲しい」という、複眼的感受性に道をひらいた。ここに「英雄」概念は複雑化し、単なるスーパーマンではなくなつた。ヨーロッパ文化はホメーロスに始まる。とはいえ「女神の子」にまつわる「含意」もまた、「改新」と「固定化」を繰り返す、神話の長い過程から生じたのであって、一挙にできあがったのではあるまい。

〔注〕

『ケンブリッジ版注釈』のものは *The Iliad: A Commentary*, Cambridge 1985 - 1993, vol. I (ed. G. S. Kirk), vol. II (ed. G. S. Kirk), vol. III (ed. B. Hainsworth), vol. IV (ed. R. Janko), vol. V (ed. M. W. Edwards), vol. VI (ed. N. Richardson) を指す。ローマ数字は『注釈』の『イリアス』ではなく、巻数・漢数字は、そのページ（当該行ではなく）を指す。

LIMC (= *Lexicon Iconographum Mythologicae Classicae*, Zürich 1981) は、巻ならびにページを省略して、項目名だけで指示する。続くアラビア数字は、図版番号である（一九九三年九月現在第六巻まで刊行）。

(1) ヘーシオドス『神統記』九〇二行以下の「交わりと出生のカタログ」の中から、該当者を捜し出せば、三人の他に、エーマティオン（メムノーンの兄弟、同じ両親）・パエトーン（エーオース×ケパロス、「太陽の馬車」を操ろうとする若者とは別人）・ポークス（プサマテー×アイアコス）・アグリオスとラティーン（キルケー×オデュッセウス）・ナウシトオスとナウシノオス（カリュプソー×オデュッセウス）が見つかる。あとテレーゴノス（キルケー×オデュッセウス）も加えられよう。さらに（『神統記』九七五行以下）カドモスはハルモニアーを妻として、不幸な娘たち（イーノー・セメレー・アガウエー・アウトノエー）を得る。ハルモニアーはアレウスとアプロディーテーの娘だから、女神とみなすべきである。事実、ピンダロスはカドモスとペーレウスの幸（女神との結婚）と不幸（子供運の悪さ）を並列している（『ピュルティアー競技祝勝歌第三』）。しかし彼の娘たち（人間）は、アキッレウスたちと同列には論じられない。

(2) テティスは、常に「女神」と称されるが、「ネーレイデス（ネーレウスの娘たち）」の一人である以上「海のニンフ」といってよいだろう。しかし『イリアス』では、「ニンフ」という呼び名は、テティスはおろか、その姉妹たちにも使われていない。第一八巻のいわゆる「ネーレイデスのリスト」には、「女神 (*Dea*)」と「ネーレイデス」が同格に併置されている。テティスが本来、古い重要な女神であったとする説については、検討を「保留」しておく。

- (3) 『イーリアス』第一卷三五七行以下―第一八卷三三六行以下(定型句)「母なる女神は、海の深み、老いた父の傍らに座っていたが、その声を聞き」
- (4) 「叙事詩の環」として括られる諸作品は、ひとにぎりの引用断片と梗概を残して散逸した。伝プロクロスの『キュプリア』梗概には「ゼウスはテミスとともにトロイア戦争を計画する。神々がペーレウスの結婚にあたり宴を開いていると、エリスが現れ、アテーナー、ヘーラー、アプロディーテーの間で、美しさに関する争いをひきおこす。女神たちはゼウスの命に従い、ヘルメースに率いられて、イダー山のアレクサンドロスのところへ、審判を受けに行く」とある。「叙事詩の環」のテクストは M. Davies, *Epicorum Graecorum Fragmenta*, Göttingen 1983 にある。
- 「叙事詩の環」に使われている神話のモチーフの一つ一つについては、岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』(創文社 一九八八年)が詳しい。また「ペーレウスとテティスの結婚」については、川崎義和「TheusとPelousの結婚伝説について」(『西洋古典文学における写体伝承史と本文校訂論の実証的研究』(科学研究費補助金成果報告書)一九九〇年)が、二次文献をも含めて詳しく吟味している。
- (5) 「エリスの排除」や「黄金のリング」さらに後述する「女神たちが提案した三者択一の代償」が、後代にできあがったモチーフである可能性は十分にある。この神話については T. C. W. Sinton, *Euripides and the Judgement of Paris*, London 1965 参照。
- (6) 『イーリアス』第二四卷二五〇行(もしくは二三〇行)はすでにアリストタルコスによって削除すべしと判断された。この場所での言及を認めるにせよ否定するにせよ、「パリスの審判」の神話をホメーロスは知っており、それにもかかわらず『イーリアス』から除外したとする意見に私は賛成である。諸意見の要約については『ケンブリッジ版注釈』VI 二七六以下参照。
- (7) M. Davies, *The Epic Cycle*, Bristol 1989, 34—35.
- (8) パウサニアースが描写する「キュペセロスの櫃」(『ギリシャ案内記』五、一八、五)には、次のような図柄もあった。「処女」テティスも彫られている。ペーレウスは彼女をつかまえようとしている。テ

テイスの手からは、蛇がペーレウスにとびかかっている。」この櫃は紀元前七ないし六世紀の作品と考
えられている (OCD, Cypselus, Chest of, 6項)。

- (9) A. Lesky, *Gesammelte Schriften*, Bern 1966, 401-409 (=Pelus und Thetis im frühen Epos, *SIFC*, 27/28, 1956, 216-226), 401. なおレスキは Meermaid と記しているが、この単語を (人魚) と訳するのは、ここではまずうことになる。テイスの (あるいはギリシヤに「いる」Meermaidの) 下半身は、魚ではない。仄聞するところでは (ある種の) Meermaid が半人半魚であると想像されたのは、ケルト神話においてであるというが、確かめたわけではないし、いずれにせよ本稿の趣旨とは関係がない。

- (10) レスキ (注9)、四〇五ページ。

- (11) 同じ神話は、アイスキュロスの作として伝承された『縛られたプロメーテウス』九〇七行以下でも使われている。ここではプロメーテウスが、ゼウスの没落は父親クロノスの呪いであるが、ゼウス自らがその没落を「結婚」によって用意していると言っている。

- (12) ゼウスは人間の数を減らし、大地の重みを軽減するために、「モーモス」叱責」と謀ってトロイア戦争をおこすため、そのきっかけとして、テティスとペーレウスの結婚式を仕組んだ (『キュブリア』断片一)。また『キュブリア』では、ゼウスがヘレネーを生ませるために交わった「ネメシス」懲罰」が、ゼウスを避け、次々と姿を変えるが (断片七)、レスキ (注9) はこれにテティスの変身のモチーフが採用されたとみる (四〇五)。このレスキの推論に対する反論は、岡 (注4)、一七二ページ。

- (13) 『キュブリア』断片二。

- (14) 『イストミアー競技祝勝歌第八』以外にも次の箇所、ピンダロスはゼウスと並べてポセイドーンに言及する。『ネメアー競技祝勝歌第四』六六行以下 (円く座を占めた大空の王と海原の王とが、ペーレウスに贈り物 (ニテティス) を与え、一族に伝えられていくであろう力を示した)、ならびに『同第五』三五行以下 (ゼウスは、ポセイドーンを説得して、ネーレイデスの一人をペーレウスの妻にした)。よって二神があい争ってテティスを求めたとするヴァージョンは、話を潤色するための一度だけ

の思いつきではない。ただしだからといってこのことから、このヴァージョンがピンダロス以前の神話であるとも、ピンダロスの創作であるとも、どちらともいえない。ただ、神話は単純な形から複雑な形に進むという原則に立つ限り、まず「ゼウスの配慮」神話ができ、その後「ポセイドーンの参入」が付与されたと考えざるべきである。

(15) 『神統記』八八六行以下。M・L・ウェストは、そもそもアテーナーはゼウスの頭から生まれたものであって、この神話と「ゼウスの覇権没落阻止」神話の一ヴァージョンである「呑みこまれた花嫁」神話との合成が、『神統記』の採用した説であるとする (M. L. West, *Hesiod: Theogony*, 401)。

(16) デイヴィス(注(7)、五八ページ)は「ヘレニズム期より前のものはない」と書いているけれども、*LIMC Achilles* にはヘレニズム期のものを見当たらず、ローマ時代のものしかない。『ケンブリッジ版注釈』IV四〇九参照。

(17) *LIMC Achilles*, 850.

(18) 岡(注(4)、二七四ページ)『イリアス』以前から伝えられた伝承において、パリスがアキッレウスを矢で倒したことは……推測できるであろう。デイヴィス(注(7)、五八ページ)は、アポロドーロスの記述が『アイティオピス』にさかのぼるか、さらには『アイティオピス』が「かかと」以外の不死身にふれていたかは、興味深いけれども難しい問いである、と記すだけで、それ以上は踏み込まない。

(19) 断片八三。引用しているのはソポクレス『アイアース』に付された古注。

(20) 有名なのがサムソンでありジークフリートである。

(21) 『アルゴナウティカ』第四卷八六九行以下。デイヴィス(注(7)、五八ページ)はこれについて、「不死」(immortal)にするものであっても、必ずしも「不死身」(invulnerability) 伝説を意味しはしない、とえらく厳密なただし書きをつけている。

(22) 『アプロディーテーへの讃歌』八一行以下。

(23) 同一九八行以下と二五二行以下を合わせる。

(24) 同一八七行以下。

- (25) 『ネメアー競技祝勝歌第三』四三行以下に詳しい。『ピュティアー競技祝勝歌第六』二二行以下にも言及がある。
- (26) 『イーリアス』第一一巻八三二行以下で、ケイローンがアキッレウスに教え、アキッレウスがパトロクロスに教えた「塗り薬」の話が出て来る。『ケンブリッジ版注釈』Ⅲ一二二、三二〇参照。
- (27) 『イーリアス』第一一巻二行以下。『オデュッセイア』第五巻一行以下。
- (28) 『アプロディーテーへの讃歌』二一八行以下。ミムネルモス『断片』四。
- (29) *LIMC* Pos. 46-288.
- (30) 『オデュッセイア』第一五巻二五〇行以下。
- (31) *LIMC* Kephelos.
- (32) 『オデュッセイア』第五巻一一八行以下。
- (33) 『イーリアス』第一巻四二三行。ただし『オデュッセイア』第一巻二三行以下に記述では、世界の西の端と東の端に別れて住んでいる。
- (34) 『イーリアス』第一九巻二行以下。「夜が明けた」を意味する「定形句」の幅広いヴァリエーションを、「定形句」の概念とどのように結び付けるべきかという問いについては、逸身喜一郎「術語 formula の混乱」『東京大学教養学科紀要』九（一九七六年）ならびに『ケンブリッジ版注釈』I一一九以下参照。
- (35) 『イーリアス』第一九巻の冒頭でのエーオースへの言及は、テティスとの連想のもとに捉えるべきとまで考える「深読み」もある。『ケンブリッジ版注釈』V二三五。
- (36) *LIMC* Achilles, 807-847; Memnon, 26-60.
- (37) 『オリンピアー競技祝勝歌第二』八三三行。『ネメアー競技祝勝歌第三』六三三行。『同第六』五〇行。『イストミアー競技祝勝歌第五』四一行。『同第八』五四行。他に次に述べる『ピュティアー競技祝勝歌第六』二九行以下がある。さらに後述の注(58)参照。
- (38) アイスキュロス『断片』(FRAGMENTA)。岩波版全集第一〇巻二四二ページ。
- (39) ギリシャ文学の流れの中における「魂の軽量」のモチーフの展開については、久保田忠利「アリスト

パネスの機知——『蛙』一三七八一—四一〇をめぐって——(その一)『西洋古典論集V』(京都大学西洋古典研究会、一九八八年)参照。

- (40) *LIMC* Achilleus, 799. cf. 800 (520/510 B. C.)
- (41) 『ケンブリッジ版注釈』IV三三四。
- (42) 一二五ページ。
- (43) 『ケンブリッジ版注釈』V一九。岡
- (44) 第二〇巻一九九行以下。
- (45) 同二〇行以下。
- (46) 『イーリアス』第二〇巻三〇三行以下。『アプロディーテーへの讃歌』一九六行以下。
- (47) 第五卷三一—行以下。ここで描かれている救出を「霧に包まれて」というのは、厳密にいえば誤りである。アプロディーテーは「白い腕」を「差し出して」(αἶθε) この語は「霧」を「かける」時に使われる、「輝く衣」で隠す。女神が取り落としたその後、アポローンが「黒い雲」で包む(三四五行)。ディオメーデースには神々が見えているのだから、第三巻や第二〇巻とは同一ではない。しかし「型」としては等しい。
- (48) 第二〇巻一七九行以下。
- (49) 第一三巻四六〇行以下。
- (50) 第一〇巻一行以下。プリアモスとアイオロスの類似は、一九九三年一〇月、成城大学でおこなわれたJ・グールド教授の講演の中でも指摘された。
- (51) *LIMC* Aineias, 59-154. そのうち、93a (エトルリア——コリントスの壺)は、紀元前七世紀末のものである。
- (52) 『アプロディーテーへの讃歌』四五行以下。
- (53) 中務哲郎『物語の海へ ギリシア奇譚集』(岩波書店 一九九一年)一〇二ページ以下参照。
- (54) テイトーノスの名前に「アナトリア」起源を採す考え方については『ケンブリッジ版注釈』III二一四

参照。

(55) 第二卷一八四行以下。

(56) キュクノスという名前を与えられた神話上の人物には、他にも伝ヘーシオドス『盾』に登場する、アレースの息子が有名である。彼はヘーラクレスに殺された。後述するアリストパネース『蛙』九六三行に付された古注は、この二人をあげるだけだが、ロシヤの『神話事典』には、合計七人もの項目がある。そのうち第三番目、「コロナイの王」は父親がポセイドーンで、息子がテンネースであった。ピアンソンは、このキュクノスと本稿で取り上げたキュクノスとが、同一人物であるとする (Pearson, *The Fragments of Sophocles*, vol. II, 149)。エウリーピデースもしくはクリティアースの『テンネース』の物語 (ヒュポテシスが残存) については、TGF (および岩波版悲劇全集) では、クリティアースの項 (vol. I, 43 F20^a、岩波一三卷一四六ページ) を参照せよ。

(57) 上述注 (37)。

(58) 『蛙』九六三行 (正確に言えば、キュクノスもメモノンも、ともに「〜といった奴」を意味した複数形)。多くの研究者は、『蛙』のキュクノスが、「ポセイドーンの子」であるか「アレースの子」か、不明であるとしている (ed. Radt, TGF vol. 3, KTKNOΣ (p. 230) et fr. 451a などドヴァアの同行の注釈に「もう一方のキュクノスが」テイトーノスの子」とあるのは不注意な誤り)。ロイド・ジョーンズは、「アレースの子」への言及ならば、アイスキュロス断片 451c にあるかもしれない (Loeb, *Aeschylus* vol. 2, 577) と憶測している。またローベルは断片 451c に、テネドスの名が読めることから、「テンネースの父」のキュクノスの登場を推測している。しかしアリストパネースの中でのキュクノスとメモノンとの対置は、トロイア戦争関連の「ポセイドーンの子」に、どちらかといえば有利であると私は判断する。なお、これは私の全くの思いつきをこえるものではないが、もしメモノンが「黒人」であったのなら (後述一三八ページ)、「キュクノスとメモノン」には「純白と漆黒(真っ白な奴と真っ黒な奴)」の対比があったかもしれない。周知のとおりキュクノスは「白鳥」を意味する。

(59) F・ベーマーの注は、キュクノスの不死身のモチーフは、比較的新しいと考えている (F. Bömer, P.

Ovidius Naso: Metamorphosen. Buch XII-XIII. 32).

- (60) もう一つアリストテレスが挙げている命題は「若くて、誓いに縛られていないにもかかわらず、出陣した」とある。
- (61) J. Griffin, 'The Epic Cycle and the Uniqueness of Homer' *JHS* 97, 1977, 39-53.
- (62) 初出はリュコプローン『アレクサンドラ』二二三三。
- (63) ヒアンン(注(57))、二巻一四九ページ。
- (64) *LIMC*は「キュクノス」についての記事をKのとて置かず、「補遺」(未刊)で扱うことを予告している。*Achilleus*の項には、キュクノスは出ていない。あくまで想像であるが、キュクノスを描いた画像資料は数少ないと思われる。
- (65) F. Jouan, *Eurpide et les legends des chants Cyprienne*, Paris 1966, 408.
- (66) アキッレウスがヘンテシレイアを殺す場面ならびにトロイロスを待ち伏せている場面は、ともに壺絵が好む題材である。「叙事詩の環」において、ヘンテシレイアは『マイティオピス』で、トロイロスは『キュプリア』で扱われていたことは伝プロクロスの梗概から分かる。ただしこれらの題材は、とりわけトロイロスは、悲劇とともに発展してきた「神話」の可能性が大きい。
- (67) S. West, *Homer: Odyssey*, vol. 1, 75.
- (68) 筆者が本稿を書くに際し手にとったのは次のとおり。J. T. Kakrides, *Homeric Researches*, Lund 1949; K. Reinhardt, *Die Ilias und ihr Dichter*, Göttingen 1961; W. Schadewaldt, *Von Homers Welt und Werk*, Stuttgart 1965; W. Kullmann, *Die Quellen der Ilias*, Wiesbaden 1960.
- (69) 『ケンブリッジ版注釈』V一六以下。
- (70) 通称「タブラ・イリーアカ」(M. Davies, *EGF* (注(4)), *Aethiopia*, T2) は、「マイアースの狂気」まゝが含まれている。
- (71) *LIMC Eos*.
- (72) アキッレウスがペーレウスから引き継いだ武具は、神々の贈り物であったことに『イリーアス』第一

七卷一九四行以下ならびに第一八卷八四行以下が言及している。しかしアキッレウスの出征時にヘーパイストス製の武器を、テティスがプティエーに出かけて行って、手渡したヴァージョンについては『ケンブリッジ版注釈』V一五六参照。

(73) 岡(注4)二三三ページ以下「アキッレウスの死とトロイア陥落(ヘクトルの死によって先取りする形であらわされる)の『同時性』は、……二人の運命の共通性を改めて認識させる。」「彼らの英雄的行為は悲劇的観点から捉えられている。」「詩の主題の *eros* であるアキッレウスの死とトロイア陥落の『同時性』、および二人の運命の共通性は、トロイアの陥落をヘクトルの死においてあらわすことによりアキッレウスをトロイア攻略者にしたのは『イリアス』の詩人にほかならぬことを示す。」

(74) 第一八卷二〇二行以下。

(75) 一一五ページ『イリアス』第一卷三五二行以下を引用して。

(76) 第一六卷四四〇行以下。

(77) 第五卷四二二行以下。

本稿の校正の段階になって

Slackin, L. M. *The Power of Thetis: Allusion and Interpretation in the Iliad*. Berkeley—Los Angeles—Oxford 1991.

を読んだ。著者の考えは、『イリアス』の成立問題とテティス神話のかかわりなどの点で、私と必ずしも同一とはいえないが、着目点は本稿と同じところが少なくないことを記しておく。

本稿は、平成五年度成城大学教員特別研究助成金による研究成果の一端である。